

## *Pride and Prejudice* における Self-Knowledge

北 風 文 子

### 〔抄録〕

Jane Austen (1775～1817) 著 *Pride and Prejudice* のヒロイン Elizabeth の self-knowledge を考察し, pride であると思っていた気持ちが実は「虚栄」であったことや, 「偏見」のために冷静な判断力を失っていたことを自覚し, 屈辱を経験した後に幸せな結婚に入ろうとしている Elizabeth が, 自己認識を深めるに際して親友 Charlotte Lucas から恩恵を受けていること, また Elizabeth の結婚には Charlotte と類似しているところがあることを明らかにする。

キーワード: self-knowledge, pride, 偏見, 虚栄, 結婚

### はじめに

Jane Austen (1775～1817) は, 長短併せ持つ普通の人々の平凡な日常を描き, 優れた才能を示して英文学に重要な位置を占めている。*Pride and Prejudice* は, 主人公 Elizabeth Bennet と Fitzwilliam Darcy の出会いから結婚までの経緯を, 二人を取巻く状況を横糸に, 「自負」と「偏見」がもたらした双方の誤解とその解決, そして自己の「自負」や「偏見」を自覚することからくる心境の変化, self-knowledge (自己認識) による人間的成長を縦糸に描いている。Elizabeth と Darcy は, 紆余曲折の末に自己の「自負」と「偏見」を認識し, それぞれが自分にぴったりの相手であると思える人との結婚にたどり着くのである。いつの時代でも人が自分自身を正しく知ることは, よりよく生きるための基礎である。

本稿では, Elizabeth Bennet の自己認識のために親友 Charlotte Lucas はどのような役割を果たしたか, Elizabeth の Charlotte に対する認識は適切であったかについて考察し, Elizabeth Bennet が自己認識を深めるに際し, Charlotte Lucas から恩恵を受けていること, そして Charlotte が選択した結婚を十分に理解せず, 批判した Elizabeth の選択にも Charlotte に類似しているところのあることを明らかにする。(なお本稿では, “pride” を「自尊心」「高慢」「自負」と三通りに解

釈し、次のように用いている。1. 「自尊心」 a feeling of elation or satisfaction at achievements or qualities or possessions etc. that do one credit. 2. 「高慢」 a high or overbearing opinion of one's worth or importance. 3. 「自負」 a proper sense of what befits one's position; self-respect.<sup>(1)</sup>

## I. Elizabethの育った家庭環境

Longbourn Hertfordshireに住むBennet氏は、才気、皮肉、よそよそしさ、気まぐれの混合物のような人で、面倒なことは可能な限り避けようとする父親である。一方Bennet夫人は、貧弱な理解力と乏しい知識、そして移り気な性質の人で、娘に有利な結婚をさせることだけに熱心な母親である。このような両親の間に何故Elizabethのように機知に富み、自由な考え方の出来る娘が育ったのか、その理由をまず彼女の家庭環境から推測し、Elizabethが自己認識を深めていく姿を考察するための出発点とする。

Longbournのすぐ近くにあるNetherfield Parkに越してきた資産家の独身男性Bingleyを、娘達のために訪問してほしい、そうしてもらえないと私達はその人を訪ねられないと言い立てる夫人にBennet氏は、“I will send a few lines by you to assure him of my hearty consent to his marrying which ever he chuses[sic] of the girls; though I must throw in a good word for my little Lizzy”<sup>(2)</sup>と返事をしてBennet夫人に次のように反撃される。

“I desire you will do no such thing. Lizzy is not a bit better than the others; and I am sure she is not half so handsome as Jane, nor half so good humoured as Lydia. But you are always giving *her* the preference.”

“They have none of them much to recommend them,” replied he; “they are all silly and ignorant like other girls; but Lizzy has something more of quickness than her sisters.” (Vol. I, Ch.1, pp.4-5. 今後Jane Austenの*Pride and Prejudice*からの引用は同様に表記)

Elizabethのことを姉Janeの半分も美しいとは言えないし、妹Lydiaの半分もユーモアを持ちあわせてなんかいないのに、Bennet氏はいつもElizabethを最良すると評価する母親から彼女が十分な慈しみを受けたとは想像しがたい。そしてBennet夫人の好む娘ではないらしいことが見て取れる。Elizabethに最も影響を与えたのは父親の方であろう。Bennet氏はElizabethを5人の娘達の中で一番愛している。そして“Lizzy has something more of quickness than her sisters.”<sup>(3)</sup>と認めている通り、Elizabethは姉妹や近隣の女性達より頭が良く、父親に何かを期待させる賢さを備えていたに違いない。しかしBennet夫妻は、娘達を愛してはいるけれど、厳しく育てるということからは程遠いように見える。夫妻のやりとりから判断すると、娘達が世間を知り社会的常識を身につけるようになるとは考えられない。このような家庭状況は、Elizabethに自由な発想と

行動をさせる基になったと推察できる。そしてまたElizabethが、Charlotteの思慮と行動を、半ば輕蔑的に観てしまうという社会的未熟さを内在させる原因とも考えられる。知的ではあるが、社会的常識にこだわらないElizabethの自己認識を深めたのは、家庭よりもむしろ、(1)親友Charlotte Lucas、(2)Elizabethに忠告をしたり、Darcyとの再会の機会を作ってくれたBennet夫人の義妹Mrs.Gardiner、(3)Elizabethが淡い恋心を持ったWickhamとColonel Fitzwilliam、(4)尊大な態度で彼女に接したLady Catherine de Bough、(5)そして未結婚相手となるDarcyといった人々との「かかわり」であろう。とりわけCharlotte LucasがBennetの自己認識に果たした役割は輕視できないと私は考える。Charlotteは、ElizabethがDarcyと出会ったその時からDarcyに引かれているにもかかわらず、そのことを認めたくない様子に気がついている。ふたりが結婚することになるまでの経緯の中でCharlotteは、時に応じて自分自身の正直な気持ちをあからさま過ぎるとも言える表現でElizabethに伝え、彼女が自己認識を深めるきっかけを与えているのである。そこでCharlotteとElizabethの会話からElizabethの自己認識を深めるためにCharlotteが果たした役割と、そのことに対するElizabethの認識を次に考察する。

## Ⅱ. Charlotte Lucasが果たした役割と、そのことに対するElizabethの認識

### 1. Darcyに対する認識

舞踏会で、Elizabethは紳士の数が足りないために踊りを休まなければならなかった。その間のことである。この土地の舞踏会に始めて参加したDarcyは、友人のBingleyに、間拔けな格好をして突っ立っていないで、とても奇麗で気心のよさそうなあの娘 (Elizabethのこと) を紹介してもらおうよう頼んでやるから踊れよ、と言われて“*She is tolerable; but not handsome enough to tempt me; . . .*”<sup>(4)</sup>と答える。ElizabethはDarcyのこの言葉を聞いてしまう。その結果、彼に対して暖かい感情を持ってない状態で、非常に意気込んで、この話を、友人達に触れて回るのである。こんなことがあった舞踏会の翌日、CharlotteはElizabethに向かって次のように自分の考えを言っている。

“His pride,” said Miss Lucas, “ does not offend *me* so much as pride often does, because there is an excuse for it. One cannot wonder that so very fine a young man, with family, fortune, every thing in his favour, should think highly of himself. If I may so express it, he has a *right* to be proud.” (Vol. I, Ch.5, p.20.)

Charlotteの本音を聞かされてElizabethは、 “That is very true,” . . . “and I could easily forgive *his* pride, if he had not mortified *mine*.”<sup>(5)</sup>と、自分の「自尊心」(pride)が傷つけられたことを認めた発言をしている。面白がって友人達に話して回った舞踏会当日は、Darcyの言葉が自分の「自尊心」

を傷つけたというほどの自覚はなく、ちょっとでもおかしいことがあると嬉しくなる快活で戯れ好きの性質で笑いながら話していただけである。Elizabethに「自尊心」が傷つけられたと発言させ、彼女の本心の認識を促したのは、Charlotteの率直な言葉である。この時のCharlotteは、Darcyのありのままを認めた発言をすることで、Elizabethが自分の「自尊心」にこだわってDarcyに対する認識を誤っていることを暗示する役割を果たしている。ElizabethはCharlotteとの対話によって自分の「自尊心」が傷ついたことをはっきりと認識したと見ることができる。ここでさらにCharlotteがElizabethの自己認識を深めたもう一つの出来事を考察する。

## 2. Charlotteの婚約と結婚に際してのElizabethのself-knowledge

Elizabethは、自分が求婚を拒絶した相手であるCollinsと婚約したCharlotteに驚くのである。

“She[Elizabeth] had always felt that charlotte’s opinion of matrimony was not exactly like her own, but she could not have supposed it possible that when called into action, she would have sacrificed every better feeling to worldly advantage.” (Vol. I, Ch.22, p.125.)

Elizabethには、Collinsが水曜日の夜にElizabethに断られ、金曜日の早朝にCharlotteに求婚するというようなことを平気でやってのけたことも驚きだったが、その求婚をCharlotteが受け入れたことはもっと驚きであった。Elizabethは、以前のようにCharlotteと信頼しあうことはもう無理だろうと思わせられ、尊敬できなくなったという苦しみと、不釣り合いな相手を選んだ親友が幸せな結婚生活を送るのは不可能だという確信に苦しむのである。このときElizabethが心配しているのは、賢明でもなければ、感じがよいわけでもないCollinsのような人と結婚してCharlotteが幸せになるはずがないというCharlotteの将来のことである。しかしながらCharlotteは、あらゆることを考えた末に行動したのである。もともと“Happiness in marriage is entirely a matter of chance.”<sup>(6)</sup>と考えていたCharlotteは、結婚に際して愛情を最も大切なこととはしていなかった<sup>(7)</sup>のである。“I ask only a comfortable home.”という彼女は、冷静な思慮分別によって、結婚にほどほどの幸せを求めたのである。両親から分けてもらえる財産もなく、幾人かの弟妹を持ち、その上に自分が美人とは言えないとの認識があつての決断である。彼女の分別は次のような心情に基づくものであった。

Without thinking highly either of men or of matrimony, marriage had always been her object; it was the only honourable provision for well-educated young women of small fortune, and however uncertain of giving happiness, must be their pleasantest preservative from want. This preservative she had now obtained; and at the age of twenty-seven, without having ever been handsome, she felt all the good luck of it. (Vol. I, Ch.22, pp.122-123.)

世間をわきまえたCharlotteの婚約を知った時のBennet氏の反応は、Charlotteはもっと賢いと思つねね思っていたのに自分の妻と同じ馬鹿で、娘よりまだ馬鹿だとわかってこんな愉快なことはないというもので、一方Bennet夫人の反応は、ElizabethがCollinsの求婚を承諾しなかったことを責め、みんなでよってたかって自分を散々な目に合わせたというものであった。妹達はほとんど関心を示さず、誰に対しても公平で思いやりのあるJaneだけが、驚きながらも二人が幸せになることを願うのである。Elizabethは、そんなJaneに次のように言い返す。

“You shall not defend her, though it is Charlotte Lucas. You shall not, for the sake of one individual, change the meaning of principle and intergrity, nor endeavour to persuade yourself or me, that selfishness is prudence, and insensibility of danger, security for happiness.” (Vol. II, Ch.1, pp.135-136.)

この言動から、Elizabethは自分の判断力にかなりの「自負」を持っていると考えられる。

Charlotteが結婚した後、彼女の是非にという勧めで新居を訪ねたElizabethは、Charlotteによってしばしば忘れられているCollinsが、そのことに気がつきもせずお互いは二人のために作られた人間のようにだと真面目くさって言うの聞いて、彼の無理解にがっかりしてCharlotteのことを心配する。それでもElizabethは、Charlotteが幸せであることを認めざるを得なかった。Charlotteが結婚に求めた満足の程度、夫をうまく導き耐えていく落ち着き、家をきれいに整える手際のよさ、Lady Catherine de Boughと程よく接していく態度などを目にしたElizabethは、  
“Mr. Collins appears very fortunate in his choice of a wife.”と話しかけたDarcyに次のように答えている。<sup>(8)</sup>

“Yes, indeed; . . . My friend has an excellent understanding — though I am not certain that I consider her marrying Mr. Collins as the wisest thing she ever did. She seems perfectly happy, however, and in a prudential light, it is certainly a very good match for her.” (Vol. I, Ch.32, p.178.)

婚約の時点でCharlotteが幸せになるなんて不可能だと判断し、姉にもそのように考えることを勧めた彼女が、実際にCharlotteの生活に接して、「慎重な見方をしますと、Charlotteには、確かに良縁ですわ。」と、認めているのである。一方Charlotteは、自分がCollinsと結婚すると決めた時から、いま自分が手に入れている程度の幸せは完全に予測していたのである。Elizabethに婚約の報告をしたとき、  
“But when you have had time to think it all over, I hope you will be satisfied with what I have done.”<sup>(9)</sup>と言っている。しかしElizabethが、時間をかけて親友の行動を考え直してみたとしても、自分の考えは間違っていないとする「自負」のためにCharlotteの思慮を十分に理解することはできなかったであろう。世間のこと、家族のこと、自分のこととすべてを考

えた上で、思慮深く自分の結婚の選択をした Charlotte の結婚生活が Elizabeth の当初の判断通りにはならず、幸せであるだけに彼女の存在が Elizabeth の「自負」に与えた影響は、大きいと考えられる。Elizabeth は不本意ながら自己の認識を改めなければならなかったのである。したがって Charlotte の婚約と結婚を見聞きすることによって自分の判断や結婚に対する認識が的確ではなく、さまざまな考え方と生き方があるという認識をせざるを得なくなったのである。即ち Elizabeth は、親友 Charlotte によって self-knowledge (自己認識) を深める機会を与えられたと考えられる。しかし Elizabeth のこの時点での self-knowledge はまだ浅いもので、彼女が自分の間違った判断に気がつき、自分自身を認識し始めるのは、Darcy の求婚を拒絶した後で手渡された彼からの手紙を何度も読み返し、深く考えてからのことである。

### Ⅲ. Elizabeth Bennet の self-knowledge

#### 1. Elizabeth Bennet の self-knowledge の瞬間

Elizabeth は Darcy の求婚を退ける際に、姉の愛している人を姉から引き離したことで、そして Wickham をひどい目に合わせたことを強く非難した。ところがそれには Darcy の方に弁明のできる理由が在り、そのことが書かれた手紙を読んで Elizabeth は、自己の誤った「自負」と「偏見」に気がつくのである。その瞬間は次のように描かれている。

She grew absolutely ashamed of herself. — Of neither Darcy nor Wickham could she think, without feeling that she had been blind, partial, prejudiced, absurd.

“How despicably have I acted!” she cried. — “I, who have prided myself on my discernment! — I, who have valued myself on my abilities! Who have often disdained the generous candour of my sister, and gratified my vanity, in useless or blameable distrust. — How humiliating is this discovery! — Yet, how just a humiliation! — Had I been in love, I could not have been more wretchedly blind. But vanity, not love, has been my folly. — Pleased with the preference of one, and offended by the neglect of the other, on the very beginning of our acquaintance, I have courted prepossession and ignorance, and driven reason away, where either were concerned. Till this moment, I never knew myself.” (Vol. II, Ch. 13, p.208.)

pride (自負) であると思っていた感情が実は vanity であったこと、判断力や理解力が prepossession と ignorance によって曇らされていたこと、人を信じる気持ちも不足しがちであったことなどがこの時やっと自覚されたのである。見当違いの非難をした Elizabeth に次のような姉との対話が見られる。

“How unfortunate that you[Elizabeth] should have used such very strong expressions in speaking of Wickham to Mr. Darcy, for now they *do* appear wholly undeserved.”

“Certainly. But the misfortune of speaking with bitterness, is a most natural consequence of the prejudices I had been encouraging.” (Vol. II, Ch.17, p. 226.)

Elizabethは、言い過ぎてしまった原因が「偏見」を促してきたためだと悟ったのである。

以上の考察から Elizabethは自分がどのような感じ方、考え方、言動をしてきたかについてかなりの程度まで自己認識をしたと言える。ここでもう少し Elizabethの self-knowledgeの考察を続けてみる。

## 2. ElizabethとCharlotteの類似性

物語も終りに近づいた章において、Darcyの二度目の求婚を喜んで受け入れたElizabethが、Janeの質問に答える次のような場面が在る。

“My dearest sister, now be be[sic] serious. I want to talk very seriously. Let me know every thing that I am to know, without delay. Will you tell me how long you have loved him?”

“It has been coming on so gradually, that I hardly know when it began. But I believe I must date it from my first seeing his beautiful grounds at Pemberley.” (Vol. III, Ch. 17, p.373.)

ElizabethがDarcyへの愛を意識し始めたのは、Pemberleyの家屋敷を見た時からかしら、との返事は、茶化した答えとも受け取れるが、私は無意識に出てきたElizabethの偽りのない心だと考えている。それは、彼女がGardiner夫妻と共にPemberleyを訪ねた時の様子に基づくものである。

She had never seen a place for which nature had done more, or where natural beauty had been so little counteracted by an awkward taste. They were all of them warm in their admiration; and at that moment she felt, that to be mistress of Pemberley might be something! ( Vol. III, Ch.1, p. 245. 下線は筆者)

“And of this place.” thought she, “I might have been mistress!” ( Vol. III, Ch.1, p.246. 下線は筆者)

Pemberleyの広大で自然に満ちた庭園と屋敷を見た時のElizabethの胸騒ぎや、Darcyの求婚を受け入れてこのような屋敷の主婦として暮らすことの意義深さが心に浮かんだこと等は、Janeの質問に対して、“I believe I must date it from my first seeing his[Darcy’s] beautiful grounds at

Pemberley,”と答えたこととピタリと符合する。従って Elizabeth が Jane にした返事は、彼女が思わず漏らした本心であると私は考える。彼女が Pemberley の美しさに魅了されたのは明らかである。かつて Elizabeth は、Charlotte の婚約を知らされた時、「シャーロットが結婚観を行動に移して、彼女の優れた感性を世間的な利益のために犠牲にしまうようなことがあろうとは思ってもみなかった」(前述 II, 2.) と感じ、“The woman who marries him[Collins], cannot have a proper way of thinking.”<sup>(10)</sup>と発言したのである。しかし、Elizabeth が Darcy への愛を意識し始めたとき「彼の美しいペムバリーの家屋敷 (his beautiful grounds at Pemberley)」を見れば、無意識であったとしても、彼女が ‘worldly advantage’ (世間的利益) を全く考えなかったとは言いきれない。加えて Elizabeth の Darcy への愛情を語り手は次のように説明している。

If gratitude and esteem are good foundations of affection, Elizabeth’s change of sentiment will be neither improbable nor faulty. But if otherwise, if the regard springing from such sources is unreasonable or unnatural, in comparison of what is so often described as arising on a first interview with its object, and even before two words have been exchanged, nothing can be said in her defence, except that she had given somewhat of a trial to the latter method, in her partiality for Wickham, and that its ill-success might perhaps authorise her to seek to other less interesting mode of attachment. ( Vol. III, Ch.4, p.279.)

Elizabeth の Darcy への愛情が感謝と尊敬によって深められたことはここから読み取れる。かつて叔母の Mrs. Gardiner に結婚については無分別な行動を慎むように忠告されたとき、Elizabeth は、“What is the difference in matrimonial affairs, between the mercenary and the prudent motive? Where does discretion end, and avarice begin?”<sup>(12)</sup>と問いかけたことがある。Elizabeth の選択については、先に述べたように感謝と尊敬から Darcy を愛するようになってはいるが、Darcy の所有する美しい Pemberley の家屋敷が彼女の決心の後押しをしたと推測しても間違いではないと考えられる。確かに彼女は欲得ずくではないが、世間的利益を無視しているわけではない。一方 Charlotte の選択は、「高い教育を受けた財産のない女性には、幸せが得られるかどうかいかに不確かであっても、結婚が唯一の名誉を失わないで居られる将来への備えであった」(前述 II, 2.) というものである。これを生きていく上でのやむを得ない決心であったと認めるならば、用心をしているのだと見ることもできる。従って Elizabeth と Charlotte の選択は、先に述べた “What is the difference in matrimonial affairs. . .” という観点からすると、経済的なことに重きを置いたか、愛情の方に比重をかけたかと言う違いはあっても、明確に区別するのは無理なことである。それぞれの立場で自分に見合った安定を求めたところは両者に共通していると考えられるのである。



## おわりに

人間の性質には自分をよく思いたいし、人からよく思われたいという傾向が、程度の差はあっても誰にでもある。また他人の「高慢」や「偏見」は目に付くが、自分の「高慢」や「偏見」はなかなか認識しないものである。*Pride and Prejudice*における主人公Elizabeth Bennetも、Darcyの「高慢」はすぐに認識するが、自分の「自尊心」や判断力に対する「自負」には認識が及ばなかった。また自分の気にかけているCharlotteは、自分と違った考え方はしていても、実際の行動は自分と同じであろうという誤った認識をしていたことにCharlotteによって気づかされる。ElizabethのCharlotteに対する認識は、適切ではなかったのであり、Charlotte Lucasの実際の言動によって自己認識の足りなさを学んだわけである。社会状況に応じたCharlotteの分別をElizabethは十分に理解できていなかったと言える。Austenに関して、Kenneth L. Moler (1938-) は、  
 “... [I]n Austen’s philosophy, the prerequisite for seeing others clearly is seeing oneself clearly; in other words, attaining self-knowledge.”<sup>(13)</sup>と述べている。人を理解するには、まず自分自身を知らなければならない。Charlotteの果たした役割は重要で、Elizabethの社会的認識や自己認識を深める機会を与えたと把握できる。ElizabethはDarcyを愛し、Darcyの所有する美しいPemberleyの家屋敷にも魅力を感じた。一方Charlotteは、Collinsを愛しているとは言えないにしても嫌っているわけではなく、将来に備えて程々の幸せを求めた。したがってElizabethとCharlotteはそれぞれに見合った安定感のある結婚を選択したという点で類似していると考えられる。

### 注

- (1) COD<sup>9</sup> pride
- (2) R.W. Chapman ed. *Pride and Prejudice*. (New York: Oxford UP, 1989). Vol. I, Ch.1, p.4. 「どの娘でも選んでもらえれば、喜んで同意しますと手紙を書いてやるから、お前が自分で訪ねて行けばよい、もっともLizzy (Elizabeth) のために誉め言葉を添えておのがね。」
- (3) ---, Vol. I, Ch.1, p.5. 「リジーは姉妹達よりは、いくらか賢いところがあるよ。」
- (4) ---, Vol. I, Ch.3, p.12. 「我慢はできるけれど、私が誘惑されるほどの美人じゃないね。」
- (5) ---, Vol. I, Ch.5, p.20 おっしゃる通りよ、私だって彼が私のpride (自尊心) を傷つけたりしなかったら彼のpride (高慢) を許してあげられるわ。」
- (6) ---, Vol. I, Ch.6, p.23. 「結婚の幸せは運次第だわ。」
- (7) ---, Vol. I, Ch.22, p.125. 「居心地の良い家庭がほしただけなの。」
- (8) ---, Vol. I, Ch.32, p.178. 「コリンズさんは良い奥さんを選んでお幸せのようですね。」
- (9) ---, Vol. I, Ch.22, p.125. 「でも ゆっくりとお考えになれば、私のしたことに満足なさると思うわ。」
- (10) ---, Vol. III, Ch.17, p.373. 「その日をあえて言うとしたら、初めて彼のペムバリーの美しい家屋敷を見たときからかしら。」
- (11) ---, Vol. II, Ch.1, p.135. 「コリンズ氏と結婚する女性は適切な考え方を知らないのよ。」
- (12) ---, Vol. II, Ch.4, p.153. 「結婚するのに、欲得ずくですのと用心してかかるのとどんな違いがあるのかしら？ 何処で分別が終って、何処から強欲が始まるのかしら？」
- (13) Kenneth L. Moler. *Pride and Prejudice: A study in Artistic Economy* (New York: G. K. Hall & Co., 1989) p.28.

参考文献

Primary Source:

Chapman, R. W. ed. *Pride and Prejudice*. (New York; Oxford UP, 1988).

Secondary Sources:

- (1) Dwyer, June. *Jane Austen*. (New York: the Continuum Publishing Co., 1963).
- (2) Kaplan, Deborah. *Jane Austen among Women*. (London: The Johns Hopkins UP, 1992).
- (3) MacDonagh, Oliver. *Jane Austen: Real and Imaged Worlds*. (Avon: The Bath Press, 1991).
- (4) Moler, K. L. *Pride and Prejudice: A study in Artistic Economy* (New York: G. K. Hall & Co., 1989).
- (5) Monaghan, David. *Jane Austen: Structure and Social Vision*. (Hong Kong: The Macmillan Press Ltd., 1980).
- (6) Thompson, James. *Between Self and World: The Novels of Jane Austen*. (Pennsylvania: Pennsylvania State UP, 1980).

(きたかぜ ふみこ 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

1999年10月15日受理